

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.194

July 2017

トランプ様宛て 笑と風刺の第二主義？

宇 沢 美 子

「今後はひたすらアメリカ第一、アメリカ第一でいく」という宣言が、1月の大統領就任演説に盛り込まれたことは未だ記憶に新しい。「第一」と繰り返すたびに、大統領の右手の人差し指がさがされるという「かわいい？」振り付けつきで、この強面メッセージは海外メディアのなかへ流布されていった。米大統領の交代はアメリカにのみ関わるものではなく、各国メディアがいち早くこの「アメリカ第一」の演説箇所を、ことさらに取り上げたのも故ないことではなかった。

このアメリカ第一主義が報道されるなか、ニュースの枠組みにとどまらない反応もいち早く登場した。この演説の3日後、オランダのコメディ系深夜トークショー番組のなかで、アメリカ第一主義をうたうトランプへのパロディ作品、「アメリカ第一、オランダ第二」が放映されたのだ。バカバカしいほどの笑いの糖衣をまぶした、トランプに対する政治風刺と自国紹介の自虐ネタをつなげた、たかだか5分ほどの短い作品ながら、YouTubeを始めネット上で瞬く間にそれは拡散した。このビデオに触発され、ドイツ人コメディアンで同じく深夜トークショーのパーソナリティーをつとめるヤン・ボーマーマンは、「アメリカ第一、オランダ第二」と類似するヨーロッパ各国ビデオを作ろうではないかと呼びかけ、自らも実践した。Every Second Counts と名付けられたビデオコンペは、ドイツ、スイス、ハンガリー（これは第二ではなく、もっと控えめに、第三を名乗った）をはじめ、ヨーロッパからラテンアメリカ、アフリカ、アジアへと賛同者の輪を一気に広げた。ちなみにアメリカの国境を脅かす仮想敵となってしまったメキシコも、そして我が国日本も力作？を作って参加している。演説後から1ヶ月にも満たない間の、グローバルな笑いのトランプ包囲「壁」である。

各国のビデオ作品は、オランダ作品とほぼ同じ形式をもつ。ビデオの内容は違っても、笑いのネタとして盛り込まれる鍵となる事象は一緒で、たとえば壁、メキシコ（移民）、各種の差別（と自画自賛）、（男性、自国）中心

主義、（トランプ）タワーが入ってくる。それぞれの国を紹介する「世界一」がナレーションによっておもしろおかしく卑小化される。そしてそのナレーションがまたトランプの声帯模写（その英語には各国の訛りが入っている）の声で語られているせいか、その分各国のお国自慢の自虐ネタに拍車がかかる。トランプのお気に入りの穴埋めフレーズ（Absolutely fantastic, It's true, Believe me, It's huge, total losers! The best (in the world.)) も頻用され、らしさの誇張演出にも余念がない。

一部からは、語り手トランプもどきが本物のトランプ大統領宛てに各国の自国紹介ビデオレターを送るという形がそもそも、わかりづらい、ヘンだという指摘も上がっている。たしかにそう言われればそうなのだろうが、私はこの「もどき」が増えることが気に入っている。そもそも大統領や首相といった存在はよくもあしくも、（形態・声帯）模写されるべき存在であるだろう。トランプを戯画化するトランプもどきの「声」の擬態的なありようこそ、このビデオシリーズの最大の笑点であり、これをなくしてしまえば、ビデオの政治風刺の起爆力も地に落ちてしまうだろう。

ビデオの最後は定型挨拶文で結ばれる。「わたしたちは今後アメリカ第一となることは完全に了解していますが、XXXX（ここに各国の国名が入る）第二ならいかがでしょう、ね？」二番でいいです、という一見控え目な発言は、アメリカへ追従の姿勢をとりながら、その權威を、大きくとはいわないが、小さく崩してみせるお笑いゲリラのセリフである。Every Second Counts のホームページ <http://everysecondcounts.eu/index.html> には世界地図があり、このビデオコンペに参加した国をクリックすると作品を見ることができるになっている。日本やメキシコの作品はまだリンクがはられていないようだが、お時間がおありの方はアメリカ第一主義の余波、パロディ作品の力作をご覧になってみるのも一興であろう。

（慶應義塾大学）

アメリカ学会 2016 年度事業報告

1. 会員数

学会運営の適正化と経費節減のため、内規第1条3項「年会費を3年間滞納すると退会処分となる」に照らして37名を除名した。それに伴い2017年3月31日現在の会員数は1,130名（前年度末1,169名）となり微減した。内訳は以下のとおり。

新入会員 34名（一般20名、院生11名、維持1団体、海外2名）

退会員 73名（除名37名、逝去3名、希望退会33名〔維持1団体を含む〕）

2. 評議員の選出について

2016年6月30日を締め切りとして理事に評議員の推薦を依頼し、その中から50名の評議員を選出した。

3. 将来構想委員会の新設

2016年に創立50周年を迎えた学会の次の50年を見据え、学会のあり方や事業の方向性を模索するため、これを新設した。

4. 50周年記念事業について

(1) 『アメリカ研究』別冊、「50周年記念特別号」（編集長・貴堂嘉之会員）を2016年12月に刊行した。本事業についてはアメリカ研究振興会より助成金の交付を受けた。

(2) 2017年11月、丸善出版より『アメリカ文化事典』を刊行する運びとなっている。

5. 会務委員会

2016年12月にPDF版会員名簿を完成させ、2017年1月18日より2週間にわたり学会HPにて会員向けに公開した。また広報・電子化委員会と連携し、英語版ページ充実等に向けた準備を遂行中である。

6. 年次大会企画委員会

2017年度年次大会（第51回）は、会報第193号に記載の要領に従い、早稲田大学にて6月3～4日に開催された。新しい試みとして会場校と共にOAHの派遣講師を報告者に含むワークショップを開催した。2018年度年次大会（第52回）は、北九州市立大学にて、2018年6月2～3日に開催予定である。

7. 年報編集委員会

(1) 年報『アメリカ研究（The American Review）』51号を2017年3月に刊行した。

(2) 会報『アメリカ学会会報（The American Studies Newsletter）』第191号（7月）、第192号（11月）、第193号（4月）を発行した。

8. 英文ジャーナル編集委員会

英文ジャーナル、*The Japanese Journal of American Studies* 第27号を2016年7月に刊行した。

9. 清水博賞選考委員会

2016年度（第22回）アメリカ学会清水博賞

小野沢透『幻の同盟——冷戦初期アメリカの中東政策』（上・下）名古屋大学出版会、2016年

10. 斎藤眞賞選考委員会

本賞は2年に1度の賞であるため2016年度の実質的な活動はなかった。2017年度の授賞に向け、候補が出揃う7月より銓衡を開始する予定である。

11. 広報・電子化情報委員会

学会ウェブサイトの管理と更新ならびにメーリングリストの管理に加え、各種広報戦略業務について協議を進めた。また、ワークショップを開催するなどしてWebページ更新の円滑化に務めている。

12. 国際委員会

(1) 以下の事業を行った。

①2016年度JAAS年次大会ワークショップA/B “Framing the ‘American Century’: Migrations across a Globalizing World”

- ②ASA との共同プロセミナー（上智大学・同志社大学）
③OAH 短期滞在プログラム（東京外国語大学・立命館大学）
④ASAK 年次大会（2016 年 9 月 30 日～10 月 1 日）への会員派遣（久保文明会長，南修平会員）
- (2) アメリカ学会海外渡航奨励金を，前期 1 名，後期 2 名に，各 10 万円ずつ給付した。
- (3) 2016 年 11 月 17～20 日にデンバーで開催された ASA 年次大会に国際委員 2 名を派遣し，日米友好基金旅費・滞在費補助金を計 5 名に給付した。
- (4) 日米友好基金給付金による 2017 年度 JAAS 年次大会への ASA 招聘研究者を，テキサス大学オースティン校の Eric Tang 氏，ワシントン大学の Rebecca Wanzo 氏に決定した。
- (5) 2017 年 11 月 9～12 日シカゴ開催の ASA 年次大会にて，ASA-JAAS Advisory Committee 企画の 2 セッションが，アメリカ研究振興会の助成を受けて開かれることを決定した。
- (6) 日米友好基金給付金による OAH 研究者短期滞在プログラムのゲスト研究者を以下の通り決定した。
・Jana K. Lipman (Tulane University) 担当：大阪大学・中野耕太郎会員（期間：6 月 1～14 日）
・Lisa McGirr (Harvard University) 担当：立教大学・松原宏之会員（期間：5 月 28 日～6 月 10 日）
- (7) 2017 年 4 月 6～9 日にニューオーリンズで開催された OAH 年次大会に国際委員 1 名を派遣し，日米友好基金補助金を 2 名に給付した。また，OAH 委員会との共催により共同セッションを開催した。
- (8) 2018 年 OAH 研究者短期滞在プログラムのホスト校が中央大学（担当：小田悠生会員，一政史織会員），福岡大学（担当：森丈夫会員）に決定した。
- (9) ASAK との交流事業として，2017 年度 JAAS 年次大会に，Sook Hee Cho 会長および Eun Hyoun Kim 氏を招待し，同 9 月 22～23 日の ASAK 年次大会には，宇沢美子副会長，若林麻希子会員を派遣することに決定した。
- (10) 2017 年度 JAAS 年次大会ワークショップ A/B のテーマを“Framing the ‘American Century’: Movements for Social Justice” とすることに決定した。
- (11) 2017 年 6 月 6 日に立命館大学（担当：南川文里会員，坂下史子会員），6 月 8 日に津田塾大学（担当：大類久恵会員）でプロセミナーを開催することを決定した。

13. 将来構想委員会

「学会の規約改訂」ならびに「年報市販化」を実現すべく原案を策定のうえ，2017 年理事・評議員会ならびに総会に諮り，承認を受けた。承認事項の詳細な資料は，学会 HP「お知らせ」欄よりダウンロードして頂きたい。

14. 会長選挙について

2017 年 4 月 28 日を締切として理事を対象に次期会長選挙を実施した。5 月 12 日に開票した結果，高橋裕子会員（津田塾大学）が選出された。

15. 名誉会員の推挙

理事会にて紀平英作元会長が名誉会員に推挙され，承認された。

次期会長選挙結果について

4 月 28 日締め切りで理事による次期会長選挙の投票が行われ，投票総数は 25 票で選挙は成立し，投票の結果，高橋裕子会員が過半数を獲得して，次期会長に選出されました。

2017 年 5 月 12 日 次期会長選挙管理委員会（梅崎透，杉山直子）

2016 年度決算および 2017 年度予算

さる 6 月 4 日の総会において、2016 年度決算および 2017 年度予算についてご承認をいただきました。ここに収支報告および予算案を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2016 年度の収支報告は、出納張その他の関連書類とあわせて、林義勝、増井志津

代各幹事の監査を受け、適切と認める旨の監査報告書が提出されていることをご報告いたします。
(財務担当 佐藤千登勢)

アメリカ学会 2016年度 収支報告

□収入の部

科 目	2016年度予算	2016年度決算
1. 年会費	9,000,000	8,952,000
2. 雑収入(雑誌売上、利息)	400,000	349,499
3. 広告収入	30,000	98,000
4. 渋沢栄一記念財団助成金	800,000	0
5. アメリカ研究振興会助成金	1,550,000	1,450,000
6. 日米友好基金(OAH)	2,295,003	2,295,003
7. 日米友好基金(ASA)	415,470	415,470
小 計	14,490,473	13,559,972
8. 前期繰越金	18,656,305	18,656,305
合 計	33,146,778	32,216,277

□支出の部

科 目	2016年度予算	2016年度決算
1. 会務費	2,757,660	3,034,825
01) 事務局人件費	600,000	600,000
02) 業務委託費	912,060	955,152
手数料	50,000	15,826
03) 常務理事会費	300,000	394,620
04) 会費郵送通信費	130,000	103,247
05) 事務用品費	100,000	149,920
06) 広報・電子化情報委員会費	150,000	82,766
07) 将来構想委員会費	0	70,000
08) 名簿作成費	345,600	452,159
09) 選挙関連費	0	0
10) 口座振替・郵便振替手数料	120,000	162,219
11) 会務雑費	50,000	48,916
2. 研究事業費	11,739,320	12,267,058
01) 年次大会費	2,300,000	2,415,215
(1) 準備費	600,000	600,000
(2) 大会費	1,200,000	1,775,215
(3) 企画委員会費	500,000	40,000
02) 国際交流費	3,289,320	3,237,470
(1) 国際交流活動費	380,000	350,000
(2) OAH短期滞在	2,002,000	2,002,000
(3) ASA年次大会派遣	457,320	435,470
(4) OAH年次大会派遣	150,000	150,000
(5) 海外渡航奨励金	300,000	300,000
03) 年報刊行費	3,200,000	3,356,425
(1) 年報編集委員会費		534,000
(2) 年報印刷費		2,354,547
(3) 年報郵送通信費・雑費		467,878
04) 英文ジャーナル刊行費	1,500,000	1,714,521
(1) 英文編集委員会費		125,000
(2) 英文印刷費		920,268
(3) 英文郵送通信費・雑費		219,253
(4) コピーエディター雑費		450,000
05) 会報刊行費	950,000	1,134,545
(1) 会報印刷費		589,356
(2) 会報郵送通信費		545,189
(3) 会報雑費		0
06) 清水博賞委員会費	300,000	260,963
07) 斎藤真賞委員会費	50,000	69,919
08) 研究教育支援費	150,000	0
09) 研究事業予備費	0	78,000
小 計	14,496,980	15,301,883
3. 次期繰越金	18,649,798	16,914,394
合 計	33,146,778	32,216,277

アメリカ学会 2017年度 予算案

□収入の部

科 目	2017年度予算
1. 年会費	9,000,000
2. 雑収入(雑誌売上、利息)	400,000
3. 広告収入	30,000
4. 渋沢栄一記念財団助成金	0
5. アメリカ研究振興会助成金	500,000
6. 日米友好基金(OAH)	1,976,410
7. 日米友好基金(ASA)	351,716
小 計	12,258,126
8. 前期繰越金	16,914,394
合 計	29,172,520

□支出の部

科 目	
1. 会務費	3,190,000
01) 事務局人件費	600,000
02) 業務委託費 委託料	950,000
手数料	20,000
03) 常務理事会費	300,000
04) 会費郵送通信費	130,000
05) 事務用品費	100,000
06) 広報・電子化情報委員会費	150,000
07) 将来構想委員会	170,000
08) 名簿作成費	0
09) 選挙関連費	400,000
10) 口座振替・郵便振替手数料	120,000
11) 会務雑費	50,000
2. 研究事業費	11,350,000
01) 年次大会費	2,000,000
(1) 準備費	300,000
(2) 大会費	1,200,000
(3) 企画委員会費	500,000
02) 国際交流費	3,000,000
(1) 国際交流活動費	450,000
(2) OAH短期滞在	1,700,000
(3) ASA年次大会派遣等	150,000
(4) OAH年次大会派遣	200,000
(5) 海外渡航奨励金	500,000
03) 年報刊行費	3,200,000
(1) 年報編集委員会費	
(2) 年報印刷費	
(3) 年報郵送通信費・雑費	
04) 英文ジャーナル刊行費	1,700,000
(1) 英文編集委員会費	
(2) 英文印刷費	
(3) 英文郵送通信費・雑費	
(4) コピーエディター雑費	
05) 会報刊行費	950,000
(1) 会報印刷費	
(2) 会報郵送通信費	
(3) 会報雑費	
06) 清水博賞委員会費	300,000
07) 斎藤真賞委員会費	50,000
08) 研究教育支援費	150,000
09) 研究事業予備費	0
小 計	14,340,000
3. 次期繰越金	14,832,520
合 計	29,172,520

第 52 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

アメリカ学会第 52 回年次大会は、2018 年 6 月 2 日（土）、3 日（日）に北九州市立大学にて開催いたします。大会での自由論題報告と部会企画案を下記の通り募集します。

会員のみなさまからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は大会事務局（taikai@jass.gr.jp）宛に、1～3 のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：11 月 20 日）

報告テーマ、1,500 字程度の要旨、およびキーワード 5 つを記載。

自由論題での報告は、海外在住の場合（下を参照）を除き、会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められ、会費納入が確認された時点で正式に審査対象とします。

<海外在住の非会員>第 52 回年次大会より、海外在住の方（国籍を問わない）は、非会員のままで自由論題での発表が可能になりました。ただし、報告が決定した場合は、3 月 1 日までに大会参加費（12,000 円・懇親会費を含む）の支払いが必要となります。大会参加費は返金不可となっておりますのでご了承ください。

報告者には 2018 年 5 月 15 日までにペーパー（和文の場合、8000 字～12,000 字、英文の場合、5,000～7,500 words 程度）を提出していただき、学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後 2 週間のみペーパーを掲載します。なお、報告内容は未発表のものとし、応募者多数の場合は要旨に基づく選考を行うことがあります。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。

2. 「部会の企画提案」（締切日：9 月 6 日）

部会のテーマおよび 800 字程度の要旨、報告者案があればあわせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申し合わせ事項にご留意ください。第 50 回、51 回大会の部会、シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第 52 回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整をお願いするため、原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金、交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域のバランスに配慮してください。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とは致しません。

3. 「分科会開催の申し込み」（締切日：8 月 31 日）

新規の場合は、分科会趣旨（400 字以内）と、連絡責任者および賛同者 5 名の氏名をお知らせください。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることをあらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

『アメリカ研究』第 52 号原稿募集について【申込み期間延長】

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は 2018 年 3 月に第 52 号を刊行する予定です。投稿申込みは 6 月 30 日で締め切りましたが、一般投稿については、以下のように申込み期間の延長をいたしますのであらためてお知らせいたします。

(1) 投稿希望者は、論文題目を付けて、電子メールで年報編集委員会（nenpo@jaas.gr.jp）に申し込んでください。締め切りは 2017 年 8 月 22 日（火）です。

(2) 原稿の締め切り期日は 2017 年 9 月 26 日（火）。

*

内 容：アメリカ研究に関する未発表論文。前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。

枚 数：論文は 33 字×34 行のレイアウトで 19 ページ以内（註を含む）。ほかに英文レジュメ（500 語）。執筆要項は学会ウェブサイト（<http://www.jaas.gr.jp>）を参照のこと。

英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

2016年に出版された英語著作、英語論文（博士論文を含む）に関する情報を学会ホームページ <http://www.jaas.gr.jp/2014/09/post-225.html> で示されている形式に従ってご記入のうえ、電子メール本文に貼りつけて、9月22日までに学会英文ジャーナル編集委員会宛（engjournal@jaas.gr.jp）にお送りください。指示された形式にしたがって原稿を作成してくださいませよう、お願いいたします。なお、本英文ジャーナル掲載の論文については、この英文書誌に収録しないこととなっておりますのでご注意ください。

30号の特集テーマは“Democracy”です。原稿応募申込み（論文要旨）の締め切りは2018年1月、原稿締め切りは2018年5月です。詳しい日程については、11月の会報（あるいはそれ以前は学会ホームページ）をご覧ください。なお、『アメリカ研究』との二重投稿、あるいは日本語、英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

アメリカ学会清水博賞第22回受賞作品と第23回公募のお知らせ

「アメリカ学会清水博賞」は、故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、1996年に設けられました。学会は、若手会員による最初の単著として刊行された著書のなかから特に優れた著作を選び、同賞を授与してまいりました。

選考委員会は、2016年1月1日から12月31日の期間に出版された著書より、自薦・他薦の5点の応募を受理しました。その後、厳正な審査の結果、以下の作品に第22回清水博賞を授与することを決定いたしました。今回は、会員9名の皆様に外部査読者として当委員会の審査にご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

第22回受賞作品：

小野沢透『幻の同盟——冷戦初期アメリカの中東政策』（上下2巻）名古屋大学出版会、2016年

次回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。当該期間（2017年1月1日～12月31日）に刊行された著書で、該当する研究にお気づきの会員（自薦も可）は、2018年1月5日（金）までに件名「第22回清水博賞候補推薦」にて事務局（office@jaas.gr.jp）宛にお知らせください。

清水博賞選考委員会

大学院生会員のみなさまへ

このたびの規約改訂により、入会時大学院に在籍中の「大学院生会員」は、以後10年間学籍の有無にかかわらず、当該会員の地位を維持できるようになりました。

その期間は院生会費（現行6,000円）が適用されますが、すでに学会在籍中の大学院生会員もこの対象といたします。10年間は、院生会員に対する助成金等への応募資格も保持されますので、積極にご活用ください。

なお、就職等の異動により、適用期間中に一般会員への切り替えをすることも会員本人の裁量により可能です。10年を超えてなお大学院生の身分が続く場合は、毎年証明書の提出をもって、期間を延長していただくことになります。以上のような場合には、学会事務局（office@jaas.gr.jp）までご連絡ください。

会務委員会

上岡伸雄 著

『テロと文学——9・11 後のアメリカと世界』

(集英社, 2016 年, 821 円)

本書は 9.11 以後に発表された英語小説を通して「テロやメディアの言説が大きな力をもつ現代」において「文学がもたらす力」を問う一冊である。各章の副題に含まれる「物語」をキーワードとし、メディア報道、2011 年の追悼式典、そこで公開されたメモリアル（記念碑）といった文字文学以外の物語媒体と文学を常に相対化させながら、文学が 9.11 をめぐる物語とどのように対峙してきたかを多角的に論じている。

第一章が取り上げるのは、D.デリーロの『墜ちてゆく男』など、実際に有名になった報道写真「落ちる男」をモチーフとした作品である。著者は彫刻家 E.フィッシュルらの芸術作品に対する世間の脊髄反射的な拒絶反応についての解説を添え、この「落ちる男」とは「直視したくないのに心の底に残っている記憶」であり、それを「白日の下にさらけ出す」ことが文学の役割の一つであると主張する。第二章は実際の 9.11 テロ実行者 M.アタを登場人物とする M.エイミスら白人作家の小説を挙げながら、これらの作品が図らずもテロリストを「理解しがたい他者」という物語の中にとどめてしまうという複雑な問題を指摘している。

ここまで取り上げた小説群をひとまず「純文学」と位置づけながら、娯楽作品に分類されることの多い B.アイズラーらのスパイ・犯罪小説を紹介する第三章は特に示唆的である。諜報機関による市民の監視活動の強化など、権力がアメリカ的理念から逸脱していく様を描くこれらの作品は 9.11 後の世界情勢を捉える上で優れたジャンルであるといい、著者はそこに作家たちの国家権力に対する批判的な眼差しを読み取っている。続く第四章が取り上げるのは、突然この監視の対象となったイスラム教の人々の物語である。M.コフが描くエリート層アラブ系アメリカ人と貧しく無学なアラブ系移民の邂逅、H. M.ナクヴィらが描く「普通のアメリカ人」として生きてきたアラブ系の人々にとっての 9.11 など、いずれもアラブ系への偏見に抗う作品であるが、著者による横断的な作品紹介から読者はアラブ系作家たちの多様性をも読み取ることになる。

対テロ戦争小説を取り上げる第五章では、P.クレイや B.ファウンテンらの作品をこれまでのアメリカ戦争小説史の中に位置づけて解説することにより、この戦争が持つ特異性を浮かび上がらせ、9.11 メモリアルにまつわる論争を描いた A.ウォルドマンの『サブミッション』を取り上げる第六章は、序章で言及されたメモリアルが内包する物語の政治性に立ち戻りながら、文学とは「反メモリアル」であるという彼女の語を引用し、9.11 を特定の物語から解放しようとする文学の役割を提示する。多くの小説紹介や作者へのインタビュー、現役アメリカ研究者の声などをふんだんに含む本書はコンパクトな一冊ながら、テロの時代の文学の力とは何か、読者に強く問いかけてくる。

下條恵子（九州大学）

和田光弘 著

『記録と記憶のアメリカ——モノが語る近世』

(名古屋大学出版会, 2016 年, 7,344 円)

本書は、植民地時代から独立革命期までのアメリカ史を対象として、事実史と記憶史の統合を試みた歴史研究書であるが、そのアプローチと分析方法は、日本の初期アメリカ史研究において実に創見に満ちたものである。大西洋史の観点から初期アメリカを再検討すること自体は、近年の研究動向の主流そのものではある。しかし、本書は一貫した堅固な分析手法によって新たな「モノ」概念を導入し、これまでの概念分析の慣行そのものを刷新している。本書で展開される新たな「モノ」概念が、ユニークであるのみならず卓越している理由は、本来であれば一冊の研究書に収録するのが困難であるはずの大きな研究テーマ膨大な事物・記録の分析整理、初期アメリカにおける文化史およびその社会史的考察、大西洋兩岸における政治思想史の比較研究、ヒストリオグラフィの批判的考察—が、文字通り統合的に論じられていることにある。

第 1 章「近世大西洋の中の貨幣」および第 2 章「物語のエフェメラ」では、本書冒頭で提示された方法論が具体的に展開されているが、読者はまずその迫力に圧倒されるだろう。それもそのはず、本書で用いられているものはすべて著者の個人蔵なのである。このハードウェアを用いて、例えば第 3 章「『完全なるジェントマン』を目指して」というソフトウェアの分析が展開される。第 4 章「ワシントンの帝国」、第 5 章「ワシントンの懐中時計」、第 6 章「ワシントンの告別演説」は、本書の主題の支柱をなす事実史に基づく資料論が展開されている。これらの諸章では、いわゆる史料批判という手続きが方法論にまで洗練されている。第 7 章「植民地時代の記憶」、第 8 章「独立革命の記憶」、第 9 章「英雄の血脈」、第 10 章「建国のアイコン」では、本書のもう一つの柱である記憶史が検討されているが、これらの諸章によって、我々は、「史実でないものの意義を見つめる」ことができる。

以上のように、本書は豊富な記録と堅固な方法論によって構築された歴史学の労作であるのみならず、新鮮な歴史学論なのである。例えば、本書で扱われているジョージ・ワシントンを挙げてみよう。我々は、政治史におけるワシントンを知っているし、伝記に記されているワシントンを知っている。しかし本書のように、ワシントンの身近な消費のあり方を知ることによって理解の地平は格段に広がるのである。それは学理として有効であるのみならず、あくまで新鮮なのである。

そして、本書を通して我々は、植民地時代から独立革命期までのアメリカが「近世 (Early Modern)」に位置付けられることを思い出すだろう。本書をより滋味あるものにしていく背景には、こうした著者の歴史論があるのではないだろうか。本書が展開する事実と記憶の厳密な研究によって、我々は無自覚に記憶し忘却する遠い過去についての、より豊かな想像力を得るのである。

石川敬史（帝京大学）

藤江啓子 著
『資本主義から環境主義へ』
——アメリカ文学を中心として——

(英宝社, 2016 年, 2,376 円)

エコクリティシズムがアメリカ文学研究に導入されて久しいが、中心的に論じられてきたのは現代作品であったように思われる。20 世紀以降、深刻な自然破壊、環境汚染が顕在化したことからすれば当然のことであろう。だが、その根源は建国から 19 世紀までの近代化にあったのであり、本書は全 9 章にわたりまさにその時代の作家を取り上げ、環境主義という観点から古典的アメリカ文学を読み直すとともに、比較的なじみの薄い作品にも光を当てることで、現代につながるアメリカ環境文学の端緒と系譜を描き出そうとする。

第 1 章において超越主義からエコフェミニズムに至る思想的変遷が概観され、第 3 章ではクレヴクール、エマ・ラザルス、ホイットマンの作品を通して、アメリカが移民の増大とともに国土を膨張させ、産業経済を拡大する過程が描かれる。第 2 章において著者は環大西洋的な文脈を設定し、英国のピューリタン革命を資本主義の起源と指定して、ミルトンの詩に「勤勉、儉約、節約」といった美德が謳われていることを指摘しつつ、「楽園喪失」から「楽園回復」に至るナラティヴに、資本主義の旧世界から新世界への移行を重ね合わせている。

第 4～7 章には 19 世紀の都市化、工業化との関わりからホイットマン、レベッカ・ハーディング・デイヴィス、メルヴィルを扱った作品論が並び、特に読み応えがある。第 4 章ではホイットマンが「ローカルな環境主義者」として、人口増加とともに経済格差が広がり、不衛生になっていくニューヨークを憂い、新聞記事と詩作を通して環境正義を訴えたとする視点が新鮮である。第 5 章ではデイヴィスの短篇「製鉄工場の生活」(1861) が後年のマックレイカーにも通じる産業小説の嚆矢とされ、移民労働者の劣悪な労働環境と工業廃棄物による汚染に関して重厚な論が展開される。第 6・7 章ではメルヴィルの 1850 年代の短篇「乙女たちの地獄」と「ピアザ」に即して詳細なレトリック分析がなされ、男性の語り手が女性工場労働者の苦境や山中に住む独身女性の孤独な姿にアメリカの「闇」を認めつつも、それがトラウマとなることを恐れ、結局は安全な場所に逃げ込む様が批判される。

「ピアザ」論では「風景」が重要な鍵概念になっているが、第 8・9 章においても「アメリカ的風景」を媒介として 19 世紀と現代の接続が図られる。前者ではソローとロバート・フィンチの作品に共通するケープコッドという場所をめぐる、「周遊」「エッジ」「変化」といった概念から人間と自然の深い関係が語られる。後者では逆に、ロマン主義的な海の描写に潜む「人間中心主義」が、いかに『白鯨』において、更にニュージーランドの現代詩人イアン・ウェッドの作品において脱却され、海は人間以外の生物もまた同等(以上)の権利で「共有する」環境であるという考えに変化したのかが示される。19 世紀のアメリカ文学を今世紀の「エコグローバリズム」に結びつけるスケールの大きな論考だが、それは本書全体についても言える。

西谷拓哉(神戸大学)

成田雅彦、西谷拓哉、高尾直知 編
『ホーソーンの文学的遺産』
——ロマンスと歴史の変貌——

(開文社出版, 2016 年, 5,184 円)

没後 150 年を迎え日本ホーソーン協会が取り組まれた、四部構成 19 編からなる本論集は、ロマンスと歴史という相関概念が同時代と後世の文学的想像力に継承されながらも、変奏や再構成、ときには逆照射をも生成していく様を、「遺産」と「変貌」の座標のもとに多方向的な文学史として記述する企てである。

十九世紀作家を扱う第一部では成田雅彦と高野直知が、ポストモダンの現代における「現実」に向き合う手法と精神的歴史を語る姿勢をそれぞれにロマンス概念にみとめることで、基調を提示する。それを受けて西谷拓哉は、メルヴィル短編の分析を通し家庭小説「ジャンルとの親和と軋轢」を浮かび上がらせる。継承と変奏の位相は、ハーディ作品における語りと女性像に『緋文字』の残存をあぶりだす吉田朱美とジェームズの『象牙の塔』にアメリカ小説生成への企画をみとる竹井智子の論考にも共有される。

第二部では、『響きと怒り』のクエンティンの語りに垣間見えるイタリアに南北戦争の影と解体から再生に向かう希望を探り当てる藤村希、「痣」イメージの残像がオーウェルからモリソン、M・ジュライへと再書き込みされていく様態をたどる辻祥子、「ラバチーニの娘」から析出されたロマンス手法がオコナーのテキスト内で共振していく様を論じた内田裕、ジャンルと時代を横断する形で『緋文字』が翻案されていく過程を追うことでその「継続的な生成力」を遺産として公証する城戸光世、オースター作品に満ちるポーとホーソーンの痕跡に父なき世界と対峙する自我の迷宮監禁というテーマの息づきを感じ取る伊藤詔子の 5 編により、二十世紀以降の作家群と芸術形態を対象にして遺産の継承と変貌がたどられる。

遺産の座標から派生する「子ども」のテーマを据えた第三部では、生田和也がパールを核にホーソーンの子供像を切り出し、高橋利明は「雪人形」から析出した奇跡の空間の再出を『秘密の花園』にみとる。稲富百合子と池末陽子はそれぞれ、末娘ローズと長男ジュリアンに偉大な父の遺産の葛藤に満ちた受容を確認する。

第四部は、ホーソーンにおける自然にエコ・クリティシズム理論からの読み替えを図る野崎直之、「天国行き鉄道」に張り巡らされた人種の言説を読み解く中村善雄、従来見えてこなかった同時代歴史の現実を作家の滞英体験から分光させてみせる進藤鈴子、南北戦争をめぐる戦争言説にたくし込まれた暴力の再生産批判を探り当てる大野美砂、『セプティマス・フェルトン』の分析を通して革命の聖地コンコード神話をかいくぐった「リアルな」歴史のテキスト化にせまる古屋耕平による 5 論文がそれぞれ、共編者が基調として提示した「現実」との、ときには逆説をも帯びた対峙のかたちを捉える。

「自分がいなかったらどうなるかを、自分自身の目で確かめよう」とする奇想を「ウェークフィールドの文学史の試み」とあがきで高尾が名づけたごとく、ホーソーンの遺産をいったん非在と仮構して文学史的現実と対比する「ダブルヴィジョン」に貫かれた論集である。

林 以知郎(同志社大学)

「人の移動とアメリカ」研究プロジェクト 編
『エスニック・アメリカを問う——「多からなる
一つ」への多角的アプローチ』

(彩流社, 2015 年, 4,320 円)

本書は、飯野正子・津田塾大学名誉教授の指導を受けたことのある人々が、各々の研究成果を持ち寄り、発表した論文集である。収められているそれぞれの考察の対象は多岐にわたっているが、人の移動が生じるグローバルな構造的要因と移動後のローカルな文脈における交渉過程を分析し、「研究そのものの普遍性を追求すること」(4 頁)を共通の目的として編まれた。

本論は、1850 年から 1920 年までのアメリカ合衆国センサスの分類や調査票の記載にあらわれる、アメリカ社会における「アジア」という概念の変化と「アジア」出身の人々の人種化に関する菅(七戸)美弥の論考で幕を開ける。続いて第二章では、飯野朋美が、1880 年代から 1910 年代にかけてのニューヨークにおける日本人移民の生活とコミュニティの形成のされ方を論じている。北脇実千代による第三章は、1910 年代・1920 年代の日系移民女性による洋服の裁縫の実践と裁縫学校の運営に焦点を当てている。丸山悦子の手になる第四章は、2005 年国境保護・テロ対策・不法移民管理法提出と、ラティナ・ラティーノというパンエスニック・アイデンティティの構築との関係を検討する。さらに、第五章では、増田直子が、第一次世界大戦後のパリ講和会議において日本政府が人種差別撤廃条項を国際連盟規約に明記するよう要求したことに対する日系移民の反応について議論する一方で、糸井輝子が担当する第六章は、1900 年代から 1960 年代までの日系人による川柳の創作活動を同時期の日本における活動との関係に着目しながら明らかにする。第七章では、長谷川寿美が、1949 年から 1953 年にかけてフロイド・シュモーが主導した「広島の家」プロジェクトという原爆被害からの復興を支援する取り組みについて論じている。小澤智子による第八章は、横田基地に駐留する軍人とその家族に対するアメリカ軍の 1970 年代までの住宅政策と、1952 年から 1968 年まで発行されていた地元紙『福生新聞』の記事に見られる基地周辺住民の生活との関係を探っている。また、第九章では、三浦裕子が、1964 年に有吉佐和子が著した『非色』を、戦争花嫁の主人公の小説内での体験を現実の歴史的背景と関連づけながら読解している。そして、小谷伸太が、合衆国の人種・エスニシティを主題とした書物と映画を長大な一覧とともに紹介・議論する第十章で、本論は幕を閉じる。

このように広範な主題に対する論考が収められた本書は、飯野正子による「あとがき」が指摘するように、学問における協働の重要性を示している。その一方で、本書では、学問において少なくとも同じくらの重要性を持つ批判的な視点はそれほど明らかに示されておらず、氏の仕事の研究史上の意義を問いながら各論考を位置づけることは、読者の手に委ねられている。そういった意味で、本書は、各論考に興味を持つ人々だけでなく、日本におけるアメリカ研究・移民研究の発展的な継承のあり方に関心のある人々(つまるところ、会員諸氏の多く)の手に取られることを待っている。

大八木豪(金城学院大学)

阿部珠理 著
『メイキング・オブ・アメリカ
——格差社会アメリカの成り立ち』

(彩流社, 2016 年, 2,376 円)

本書は長年アメリカ先住民研究の第一線で活躍されてきた著者の最新作である。阿部氏はアメリカにおける豊富な滞在経験の中でアメリカ先住民社会でのフィールドワークを継続し、その成果である『アメリカ先住民—民族再生に向けて』、『アメリカ先住民の精神世界』など多数の著作を通して、先住民社会の実態と、現代社会批判ともとれる彼らのオルタナティブな精神世界を提示してこられた。その著者によるアメリカ史研究ともなれば、多くの読者の関心をひきつけずにはおかないであろう。

全七章から成る本書は、移民とインディアン(第一章)、ピューリタンと非ピューリタン(第二章)、南部貴族と黒人奴隷(第三章)、西部開拓の夢と現実(第四章)、ワスプとマイノリティ(第五章)、資本家と労働者(第六章)、そして「アメリカの世紀」の繁栄と分裂を描く第七章から成る。まさに「持てるものと持たざるもの」の対比を軸としたアメリカ史である。植民地時代から現代に至るアメリカ史の主要なテーマを扱いながらも、著者の視線は、常にその中で作り出されてきた経済的、政治的、社会的、文化的弱者の存在と、彼らが経験した「不自由で不平等で非民主的なアメリカ」の歴史的功罪に注がれている。

こうしたテーマを通して本書が訴え続けるのは、アメリカのあらゆる時代と地域、そして民族間関係の中に存在し続けてきた「格差」である。「アメリカの幸福と豊かさ」は、常にそれを享受できない多数の「不幸」の上にこそ成り立ってきた。開かれた「社会上昇の機会」、いわゆるアメリカンドリームというアメリカ史の無二の美点でさえ、インディアンからの土地の収奪という「不幸」の影にその説得力を失う。著者が「インディアン保留地での体験が、私のアメリカを見る視点を定めたように思う」(p2)と述べるように、本書には「もっとも貧しく、もっとも不健康なアメリカのどん底のインディアン社会」(p2)に身を置き、アメリカ社会を見上げてきた著者だからこそ描き切ることのできた「格差社会アメリカ」がある。

アメリカ史の通史的な理解を目的とした本書の射程は広い。歴史的に主要なテーマのみならず、そこから近年のアメリカ社会にみられる諸現象、例えばメガチャーチ、宗教右派、レイシャル・プロファイリング、ゲイティッド・コミュニティ等を読み解くその視点は、読者を必然的に現代に引き戻す。また事件史のみならず、西部のアウトローから「ボストン・ブラーミン」に至るまで多様な人物や社会階層に対する著者の鋭い描写も光る。本書はアメリカ(史)研究者に限らず、アメリカ研究を専攻する大学(院)生を含めた幅広い層の読者を獲得するであろう。最後に、脱稿された 2016 年 8 月はまさにアメリカ大統領選挙キャンペーンの真っただ中であり、奇しくも現代の格差社会アメリカを象徴する白人労働者の高い支持を得たドナルド・トランプの台頭には、当時、誰もが不穏な空気をかき取っていた。その意味で、本書には現在のアメリカを理解しようとする読者のさらなる思索を促す要素が詰まっており、何よりもアメリカを見続けてきた著者が現政権をどのように検証するのか、今後の考察を待ちたい。

野口久美子(明治学院大学)

小野沢透 著

『幻の同盟——冷戦初期アメリカの中東政策
(上・下)』

(名古屋大学出版会, 2016年, 上下各6,480円)

毎日のように中東関連のニュースを目にするようになって久しい。本書は、この重要な地域に対するアメリカの政策を歴史的に分析し、新たな知見を提示している。本書の研究対象は、トルーマン政権からアイゼンハワー政権にいたる、冷戦初期のアメリカの対中東政策であるが、本書の意義はこの限られた時期を越え、現代に至るアメリカと中東の関係に新たな光を当てている。

上下2巻、1200ページを超える、内容的にも物理的にも重厚な本書の議論は、おおよそ3点に集約される。まず、冷戦初期のアメリカ政府は、中東全体を西側陣営に結びつける「西側統合政策」を一貫して追求していた。第二に、スエズ危機やアイゼンハワー・ドクトリンは「西側統合政策」の放棄を意味するものではなかった。転機になったのは、1958年のイラク革命であった。第三に、イラク革命以降のアメリカ政府は、特定の中東諸国と永続的な関係を持たないオフショア・balancing政策をとり、20世紀末までこれが維持された。これらの議論が、アメリカおよびイギリスの政策形成過程の緻密な分析から、鮮明に浮かび上がってくる。

本書の主張には、通説への大胆な挑戦が含まれている。もっとも重要なのは、1956年のスエズ危機におけるアメリカの政策転換を否定する点であろう。一般的にスエズ危機は、中東におけるイギリスの影響力が決定的に後退し、アメリカが新たな地域的覇権国になった転換点と考えられている。これに対して本書は、アメリカの政策にも米英関係にも、スエズ危機前後での変化を認めない。むしろ重要なのは、2年後のイラク革命が契機となって生じたアメリカの政策の変化であった。ただしこの時の変化は、米英関係に生じたものではなかった。むしろ、アメリカ政府の対中東政策を律してきた「西側統合政策」にこそ、政策転換が生じていた。このように本書は、アメリカとイギリス、中東地域の関係を理解する新たな枠組みを提示している。

評者にとってもっとも印象的なのは、本書が膨大な一次史料を用いつつもその文言を追うことに留まらず、政策文書の基底をなす構想やイメージを描き出すことに成功している点である。たとえば、本書の分析の中心を成す「西側統合政策」は、一時期の政策文書で使われた概念に過ぎない。しかし本書は複数の政策文書を付き合わせ、「西側統合政策」という言葉が使われなくなった後も、その実現が政策目標であり続けたことを明らかにした。作成された文書の背景を抉り出す史料分析の深みは、本書の魅力の一つである。史料は「人がそれらに問いかけるすべを知らなければ何も語らない」というマルク・ブロックの言葉がある(『歴史のための弁明』岩波書店、2004年、46頁)が、本書は筆者が史料に問いかけたさまざまな質問の集大成といえよう。アメリカの中東政策のみならず、アメリカ外交全般の理解を深める一冊であることは疑いない。

倉科一希(広島市立大学)

山岸敬和・西川 賢 編

『ポスト・オバマのアメリカ』

(大学教育出版, 2016年, 2,592円)

トランプ時代を読み解く意外な近道は、オバマ政権を振り返ることかもしれない。本書は8人の研究者による本格的なオバマ政権総括である。編者である山岸敬和・西川賢は、アメリカの「歴史的地殻変動」として、人口動態と二大政党の変化に着眼する(序章)。2016年7月と大統領選挙以前に出版されているものの、トランプ時代に焦点となる背景を先取りする問題提起であった。

第1部の「制度」論では、まず「大統領制」(梅川健)が検討される。大統領単独での政策形成がどの程度行なわれてきたかの事例分析は、トランプ政権においても核心となる斬新な視点と言える。また、次章の「官僚制」(菅原和行)ではオバマ政権期の行政改革が詳述される。新自由主義的な行政改革が、アメリカ政治の分極化のなかで「一つの妥協点」になりつつあるとの指摘は鋭い。さらに「政党制」(西川賢)の章では、政党再編成による「6つの政党制」が整理され、イデオロギー的分極化の深まりが大統領のジレンマとなる構造が明かされる。これを踏まえたオバマの統治スタイルの論考は説得力がある。

第2部は「アクター」が対象である。「メディア」(清原聖子)の章では、オバマ政権の個性的なソーシャルメディア利用が詳しく検討されるが、「オープンガヴァメント」の実態は日本ではほとんど紹介されておらず極めて興味深い。次章の「シンクタンク」(宮田智之)も、イデオロギー系シンクタンクの隆盛や外国マネーとの結びつきへの批判という新たな視点をシンクタンク研究に与えている。

第3部の「政策」論では、「人種政策」(荒木圭子)の章で、「脱人種」傾向があったオバマ政権が、2期目以降、刑事司法制度改革、住宅の公正な供給など、対黒人政策を積極推進していた知られざる側面が丹念に掘り下げられている。「医療政策」(山岸敬和)の章は、オバマ政権最大の成果でもあり、トランプ政権でも引き続き焦点になっているオバマケアの成立過程を扱う。アメリカの保険制度史についても示唆的な指摘が少なくない。最後に、オバマの外交政策を「アメリカ外交の伝統が融合して個別政策を導いた」ものと位置づけ、同政権の外交を概観するのが「外交・安全保障政策」(小濱祥子)である。本章は国際政治学理論の趨勢に対する解説としても秀逸だ。戦略的相互依存を中心に据えた分析視覚の台頭で、民主政治と外交の研究上の壁が低くなっているという。

このように本書は単にオバマ政権の成果を記述するだけでなく、長期的なアメリカの変動の文脈のなかに同政権を位置づけている点で独自性がある。各章の概略的な解説は簡潔ながらも的を射たもので、アメリカ政治の包括的なテキストとしての価値も小さくない。今後積み重ねられていくオバマ政権期の研究にとっても、トランプ政権の今後を見通す上でも必須の文献である。

渡辺将人(北海道大学)

中野博文 著

『ヘンリ・アダムズとその時代』

——世界大戦の危機とたたかった人々の絆』

(彩流社, 2016 年, 2,052 円)

2013 年に彩流社の新シリーズとして刊行が開始されたフィギュール彩。そのシリーズ 49 冊目として刊行されたのが、アメリカ史のなかに燦然と輝くアダムズ家の一員であり、『ヘンリ・アダムズの教育』の著者として知られるヘンリ・アダムズの半生をコンパクトに描いた本書である。タイトルにあらかじめ示されているとおり、本書はアダムズの思想の内在的検討を目的としたものではなく、大部な著作を著わすかわらで、クローヴァと妻のマリアン・フーパー・アダムズの社交の手腕に助けられつつ、首都ワシントンの邸宅のサロンで展開された、さまざまな人物たちとアダムズとの交流を中心に描くなかで、世界史的な激動の時代の歴史的な意味づけを模索している。

本書の特徴のひとつは、幅広い読者を対象としたフィギュール彩のシリーズの一書として、19 世紀の後半から 20 世紀初頭までのアメリカの基本的歴史を、アダムズの半生に即して知ることができるように工夫されている点である。若き日のクローヴァ、あるいはヘンリの父であるチャールズ・フランシス・アダムズの政治的キャリアをとおして、読者は南北戦争の勃発とその後の帰結に触れることができる。あるいはエリザベス・シャーマン・キャメロンの方であるジェイムズ・ドナルド・キャメロンをつうじて、読者は政治マシンの当時の強大さについて理解を得ることができる。さらには世紀転換期の門戸開放通牒について、本書はアダムズやジョン・ヘイだけでなく、ウィリアム・ロックヒルやアルフレッド・ヒッブスレーといった、脇役の地位に置かれがちな人々にも十分な光を当てながら、門戸開放にこめられたかれらの思いを描いている。その際に本書は、ロックヒルの妻であるキャロラインの死や、市間に訪れたヒッブスレー夫妻とロックヒルとの交流などのエピソードを差し挟むことによって、描かれる人々にできるかぎり寄り添っている。総じて本書では、妻を突然の自死によって失うという悲しみを内に秘めつつ、慈愛に満ちた人物としてアダムズは後景に控え、きわめて多様な人物相関が論じられるなかで群像劇のように歴史が描かれていく点に特色がある。歴史家の手になる本書の叙述はもちろん抑制されたものであり、一次史料ならびに二次文献に基づく緻密な学問的成果である。そのうえでなお、本書には歴史小説の趣きがある。

歴史小説の趣きは、本書が採る叙述上の構成によるところも大きい。本書の序章はアダムズ亡き後の 1939 年、イギリス国王の初めてのアメリカ訪問を迎えるエレノア・ローズヴェルトとエリザベス・リンゼイの胸中にあった、第一次世界大戦へのアメリカ参戦を契機として更迭された駐米イギリス大使、セシル・スプリング＝ライスの思い出から始まり、最終章でふたたび本書は、このふたりの女性の平和への思いに立ちかえる。その意味で本書は、ヘンリ・アダムズの名前を冠した、かれの薫陶を受けた女性たちの物語である。

井上弘貴 (神戸大学)

菅 英輝 著

『冷戦と「アメリカの世紀」——アジアにおける「非公式帝国」の秩序形成』

(岩波書店, 2016 年, 6,912 円)

本書は、長年日本のアメリカ外交史・冷戦史研究をリードしてきた著者による第二次世界大戦後アメリカのアジアにおける戦後秩序構築のあり方を問う研究である。著者はまず、アメリカが目指した「リベラル」な国際秩序とはいったいどのようなものだったのかという根源的な問いを突き付け、アメリカの秩序形成のメカニズムの解明を試みる。そして「リベラル」な秩序を目指しつつも現実には民主化よりも資本主義や冷戦の論理を優先させて「非公式帝国」を形成した結果、アメリカが目指す秩序や理念とは相容れないはずの非リベラルもしくは反自由主義的な要素をも包摂してきたことが論証される。こうした分析において著者が援用するのは「コラボレーター概念」である。アメリカはアジア地域の脱植民地化過程において「コラボレーター政権の育成」を試み、「その成功と失敗」のプロセスが戦後秩序を形成し変容させてきたと著者は主張する。

北東アジアでは韓国の李承晩政権と国民党中国の蒋介石政権、東南アジアでは南ヴェトナムのゴ・ディン・ジェム政権とインドネシアのスハルト政権を対象とし、アメリカがそれぞれの地域の親米政権をコラボレーターとして育成していく状況が分析される。しかしこれらの多くの地域では「リベラル中道」勢力が欠如しており、結果的にアメリカは非民主的勢力を支持せざるを得ない。さらにアジアのナショナリズムによる反発、現地政権の脆弱性、あるいはインドにおけるコラボレーターの不在といった状況が存在する地域において、アメリカのリベラルな秩序形成は困難に直面し、あるいはヘゲモニーの確立に失敗した。そしてアジア各国のコラボレーターの育成と支援において冷戦の論理が優先された結果、民主化よりも親米性が重視されて「リベラルな秩序」に「非リベラルな要素」を内包するという矛盾が生まれたという。

こうした分析枠組みにおいて日本の指導者たちもまたアメリカに依存しつつその秩序形成とヘゲモニー確立に協力し貢献してきた「コラボレーター」たちであったと位置づけられている。吉田茂が築き核密約や沖縄返還問題にも見られる日本の対米協調と対米依存が表裏一体となった日本の外交路線においては、日米関係を危険に陥れるような外交政策は取りえなかったと分析されている。しかもアメリカはその秩序形成において日本に重要な役割を付与することで日本のナショナリズムを管理してきたという。二つの「ニクソン・ショック」は日本に苦悩と対米不信をもたらしたが、田中政権の日中国交正常化政策はやはり「コラボレーター」として日米安保体制の堅持を前提とするものであったことが深く洞察されている。

全 7 章からなる本書では多数の先行研究と膨大な一次史料に依拠して、アジア諸地域の親米政権とアメリカとの関係が秩序形成にもたらした意義が説得的に分析されている。特に戦後日本の各政権の対米依存・対米協力がアメリカの秩序形成において果たした役割の分析において非常に優れており、多くの示唆に富む書である。

伊藤裕子 (亜細亜大学)

新入会員

入江敏子	同志社大学（院）	衆 民 日
手賀祐輔	二松学舎大学	外
大木雛子	早稲田大学（院）	文 化 ジ
峯真衣子	中央学院大学	文 化 民
リム・ケビンマイケル	愛知大学	文
駄馬裕司	なし	政 外 史
佐々木優	筑波大学（院）	化 衆 文
藤坂恭子	津田塾大学	ジ 史
下村智典	京都大学（院）	思 政 社
川端理絵	三重大学（講）	化
和氣一成	早稲田大学	文 化 思
古井義昭	青山学院大学	文 史 化
杉野綾子	日本エネルギー経済研究所	政 経 環
佐久間亜紀	慶應義塾大学	教 史 ジ
河村真美	神戸大学（院）	政 思 民
三輪恭子	東邦大学	文 化
朱琳	同志社大学（院）	史 化 衆
内田大貴	慶應義塾大学（院）	文 化
川口悠子	法政大学	史 日
（株）クリムゾンインタラクティブ	維持会員	
（株）ブックマン京都	維持会員	

*専門領域の略記については、PDF 版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による

会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局（office@jaas.gr.jp）までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

事務局

編 集 後 記

春休み中、トランプ大統領就任後、初めてアメリカを訪問した。直前のオンラインでの ESTA の申請で、これまでの経験では即座に承認が下りていたにもかかわらず、今回は画面に「渡航認証保留」と表示されて少々焦った。だが、その後すぐに申請が認められて胸をなで下ろした。

訪問先がニューヨーク郊外であったため、トランプ・タワーにも 30 年以上ぶりに赴いた。厳戒態勢が敷かれているかと思いきや、警備も思ったほどではなく、正面玄関の前で記念写真を撮っている観光客も多くいて、少しほっとした。

（中嶋啓雄）

2017 年 7 月 30 日 発行
ア メ リ カ 学 会
〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502
学協会サポートセンター内
Tel: 045-671-1525 Fax: 045-671-1935
http://www.jaas.gr.jp
発行人 久 保 文 明
編集人 中 野 勝 郎
印刷所 啓文堂松本印刷
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12